



Title	古賀 徹「超越論的虚構 : 社会理論と現象学」
Author(s)	高幣, 秀知
Citation	哲学, 38, 171-177
Issue Date	2002-07-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48023
Type	departmental bulletin paper
File Information	38_171-177.pdf



《書評》

古賀 徹 『超越論的虚構——社会理論と現象学』（情況出版）

高幣 秀知

全五章、三七九ページにわたる大作である。力業であるといつてもよい。しかし、随所にみられる明快な論定が、ともすれば難渋をきわめる論述のなかに埋もれそうになっているかにもみえる。ひとまず、順をおって全体の概略を通覧しておこう。主題は、社会理論についての超越論的考察を現象学の立場から遂行することにより、社会と人間についての理論に一定の認識論的基礎を与えるとともに、その臨界を示すところにある、といえよう。そうした目論見のために本著作では、フッサールの超越論的現象学を基軸として、現代哲学の様々な理論的潮流による媒介を経たうえで、社会についての理論が現在どのような資格において存立しうるのか、について著者独自の見解が示されようとする。

第一章において、それ自身理解不能となつた事実の連鎖を合理的に理解する権利根拠がフッサール現象学に基づいて構築される。それは機械のように自動的に展開する事実連鎖を意味連鎖のうちで把握する直観を条件とするものであり、その直観によってすべての認識が可能となるがゆえにその権利根拠は必然的であると主張される。だが意味連鎖による合理的理解、超越論的反省の可能性は、その意味連鎖それ自体がすでに深く機械化しそのうちに事実性の要素を包含しているがゆえに挫折せざるを得ない。しかしながら第二章においては、ルカーチやフランクフルト学派の議論を用いながら、合理的理解のその不断の挫折こそが、その理解それ自体を可能にしている客観的・物質的条件を社会的なものとして示す条

件を形成するという。したがって超越論的条件としての社会を表現するカテゴリーはすべて事實的・物質的性格を帯びており、それ自体さらなる説明を要求する批判的本質概念であるという。また第三章においては、このようなカテゴリーの物質的性格が、事実と意味との知覚による同一化的把握を原理的に不可能とすること、にもかかわらずその同一性が認識の前提とされているがゆえに、社会的認識の成果として析出されるカテゴリーはすべて虚構的性格を帯びていることが示される。そのうえで本論文は第四章において、現実を展開されている理解社会学、および精神分析や文化人類学の認識成果の虚構的性格を詳細な議論によつて指摘し、その認識の限界、その限界を超越する際の危険について指摘する。その上でそのような虚構的性格を帯びたカテゴリーがその虚構性のゆえに認識を不可能とするというのではなく、むしろ社会理論というかたちで遂行される認識がそうした虚構性それ自体によつて積極的に可能となつていることが、メルロー・ポンティの議論を援用しつつ示されることになる。虚構的性格を帯びた規定性によつて、むしろ社会的現実なるものの次元が構成されているのである。最後に第五章は主にアレントの議論によりながら、社会的なものについての超越論の規定はその虚構的性格のゆえに別の規定の可能性を、ひいては別の理論の可能性を豊かに生み出すこと、しかもそうした理論としての複数の他者の視点によつてみずからの一面性をつねに補完され、批判されることを示す。その相互の緊張を保った競合関係が社会的なものの規定をめぐつて理論的な公共性の空間を構成し、その空間のうちではじめて、それ自体は現象することのない不可視の他者の次元を可視化することができるようになる、と主張される。

現象学はその超越論的自己反省の臨界において、自己同一性要求を解体させることによつて、社会理論の本源的に反・一義的な性格、すなわち社会理論における超越論的虚構の次元を明らかにする、ここに構想される複数性の現象学こそが社会的公共性の空間を基礎づけるとともに、全体論的社会理論の独断的暴力からの脱却を可能とするという本著作の主旨

は、十分に刺激的である。こうした認定の上でなお、さしあたりいくつかの論点をあげるとすれば、フツサル現象学の解釈において、フツサルその人の哲学とその後の方法的展開とを厳密に区別すべきであるとする議論はありえようし、またベンヤミン、アドルノ、フーコー等のそれぞれについて、より立ち入った論述を求める立場もあろう。さらにまた、社会的実在性の次元における矛盾、批判といった局面への分節化が必ずしも明瞭ではないという指摘も可能である。しかし、これらはいずれも、社会理論の認識論的基礎を究明するという本論文の一貫した意図から生じる結果として、ひとまず了解されるところである。以下の書評の範囲では、ひとつには、こうした論考集成の基底にある著書の視点について、またいまひとつには、「超越論的虚構」という本書の中心概念そのものについて、短見を述べておこう。

「最終章、あるいはあとがき」の部分で著者は、石牟礼道子『苦海浄土』（一九六八年）を引用しながら、水俣病患者、山本九平少年をめぐる情景を考察している。有機水銀中毒におかされて目がみえず、ひたすらラジオにかじりつく少年が熊本大学による集団検診をすすめる水俣市役所の職員にたいして、逃げずさりながら吐く言葉――「いやばい、殺されるもね」。有機水銀を垂れ流しつづけた加害企業、その企業を守ろうとした地域社会、被害の拡大を放置しつづけた県当局や行政府ばかりではなく、さらには、水俣病の原因物質を究明し診断技術を確立してきた熊本大学の研究者たち、その臨床医学までもが、依るべき抵抗の根拠地すら破壊されつくした盲目の少年によつて拒絶、告発されているのである。そして、こうした「客観性の暴力に押しつぶされてゆく存在に憑依してその内側から自らの身体に受ける暴力を記述してゆく」のが石牟礼の手法であったとすれば、著者は九平少年と同様の位置から、「概念を、主観の側に密着した物質――超越論的虚構――として位置づけ、理論と認識を客観性の暴力から救出するかたちで再定義すること」、これをみずからの課題とする、というのである。やや唐突ながら、評者はふと手元にある一枚の複製写真に想いいたる――「アフガン難民の少女、パキスタンのクエッタで」と題された、二〇〇一年十二月一五日付の朝日新聞夕刊に掲載された報道写真の私家版複製であ

る。「故郷をはなれて、さまざま思い」と題された解説記事には、「食器やナベ、わずかな食糧以外にはほとんどなにもない家のなかに、鏡が一枚ぼつりと置かれていた」と記されている。少女がかぶっている鮮やかに紅いシヨールは、よくみるとほとんどボロ布であり、頬にあてられた指先の爪には泥土が黒く詰まっている。そしてなによりも、その瞳は、獐猛とでもいうほかない怒気をはらんで、こちらを見詰めているのである。少女のまなざしには、おそらくは「善良なる市民」でもあるかもしれないカメラマンすら、はじめて身近に見る敵、彼女が生まれてからこのかたながく、かの静かな大地を破壊しつづけながらその姿をついにあらわすことすらなかった「敵」か、と映じているはずである。いまだ分別ないその憤怒のまなざしに評者は射すくめられる。さらにまたひるがえって、この数一〇年にわたって出版され翻訳されて積みあげられてきた夥しい分量の例えば「デモクラシー」をめぐる文献群のうち、はたして一体どれが、この怒りの瞳に込められていることができるのか、といった疑念にとらえられる。「社会理論が必要である。このことは以前も、この現在も同様である。しかし、使いものになる理論はどこにもない。依然として、理論が必要である、ということだけが真実であり続けている」といった趣旨の、一九三〇年代「全体主義」の時代のシモーヌ・ヴェイユの言葉が久方ぶりに記憶に甦る。本書に散見される、先行する諸理論にたいする筆者の素気ないともみえる応接、むしろそれらの連結を生命線とする構成は、こうした事情にこそ由来するのであろうか、と推定される。

こうした評者の想念は、この著作の背景をなす著者の視点から遠く離れるものではなからう。著者は本書出版直後の別の文書で、次のように述べている。「原理的にすでに経験は破綻していながらもたいいていの場合それは隠蔽されているが、ときにその隠蔽が不可能となるような極限的な事象が生起する。そのとき、自己同一的だと思われていた経験とその相関者としての事象ないしは他者が自己自身の内部に潜在的に保持していた差異性が露出し、経験の対象はその経験の内部で理解不能となる。そのときにはじめて、その破綻の実相そのものを理解にもたらそうとする還元の次元が動機づけられる。

これはフツサールの還元概念に基づきながらも、それを経験の破綻という次元にまで拡張したときに構成される新たな還元概念に他ならない。「これはフツサールの還元概念に基づきながら云々……」と著者は云う。しかし、それはむしろ、あきらかに、フツサールの立場を大幅に組みかえるもの、越え出るものであると論評するほかない。しかしながらまた、云うところの「新たな還元概念」は、そのこととは別に――例えば、『ハイデルベルク論稿、1912-1914』などにおいてルカーチが云おうとしていた「等質的還元」といった先行的構想との類比において――擁護されてよい、むしろ展開すらされてよい、というのが評者のいまひとつの論評である。後ずさりしながら反撃の言葉を吐く少年のかたちにおいてばかりではなく、死に絶えんばかりの風景のなかで、怒りの瞳を「敵」にさしむける少女のすがたにおいて。もちろんさらに、わたしたちの視界からは遮断されている形姿、わたしたちには聴こえない声が実在している。ちなみに、『苦海浄土』がながいあいだ、どのような出版事情によるものか、絶版状態にあったというのに似て、連載を予告されていたさきの「アフガンの冬、2001」シリーズは、一回限りで中断されたままである。

本書の中心概念をなす「超越論的虚構」をめぐる問題群に移る。ひとまず確認しておかなければならないのは、「超越論的虚構」なる虚構が実際に存在するのではなく、社会的実在を構成する諸理論が、「超越論的に云えば」――あるいは超越論的に、と云いたければ――虚構的性格をもつ、ということであろう。社会的諸過程に実在するのは、そうした虚構的性格を必然的にもつところの複数の諸理論である。そうだとすれば、この地点においてなお、著者による「超越論的虚構の複数的可能性」、さらには「超越的理論の複数性の必然性」といった表現に接するとき、評者としてはそれらの理解にやや困難を覚える。評者はかつて、アルチュセールのイデオロギー論『イデオロギーと国家のイデオロギー装置』（一九六九年）の批判的転換を試みた経緯をもつ。詳細には『ルカーチ弁証法の探究』（一九九八年）第三部第三章を参照ねが

うほかないが、ここでの行論の必要上、その要点部分のみを再度、記しておく。①社会的存在におけるイマジネールな契機は、イデオロギー成立の可能性の条件をなすにとどまるのであって、イデオロギーそのものとは区別されなければならない。②イデオロギー装置それ自体がまた、根源的にイマジネールな契機を内在させているかぎり、必然的に代替的であり、また複数化せざるを得ない。③イマジネールでありながらイデアル・レエールでもある社会的存在が、複数のイデオロギー諸形態にたいして拮抗的に関係するかぎり、葛藤、闘争、そして批判の次元こそが永続的となる。イマジネールな契機、イデオロギー的な契機、そしてイデアル・レエールな契機によって編成される社会的存在の原基的構造は、自然支配と社会統合の全体的連関が持続しているかぎりは潜在化するが、とりわけその連関が破綻する転換の局面において前景化する、とする評者のこうした把握からすれば、著者においては①諸理論の虚構的性格と、実在的に社会過程を構成するとされる超越論的虚構なるものとが分節化されていないのか、また②社会的存在におけるイデアル・レエールな契機がそれとして位置づけられていないことから、あたかも超越論的虚構なるもののものが「複数化する必然性」が探られる、といった奇怪な構成をとる仕儀に至っているのではないか、といった疑念が浮上するのである。もとより、本書第五章にみられるアレント解釈、というよりアレント「改釈」すなわち、「社会的なものについての超越論的規定はその虚構的性格のゆえに——中略——理論としての複数の他者の視点によつてみずからの一面性をつねに補充され、批判されることを示す。その相互の緊張を保つた競合関係が社会的なものの規定をめぐつて理論的な公共性の空間を構成し、その空間のうちではじめて、それ自体は現象することない不可視の他者の次元を可視化することが可能となる」、といった結論的主張は極めて刺激的にして魅力的であり、本書の論述のうちで最も成功している箇所のひとつである、といわれるべきであるとしても、本書評冒頭においた、著作第五章概略の引用であるが、「中略」部分に注意いただきたい。「超越論的規定」が、「別の規定の可能性を、ひいては別の理論の可能性を生み出す」のでは、ないのである。

ことあらためていうまでもなく、「超越論的」とはなによりも語の本来の意味での「方法」ないし「やりかた」Verfahren（アドルノ）にかかわることがらであり、カント、フッサールのいずれにおいても、なんらかの価値領域としてそのものが実在するというのではなからう。そしてまた、著者によれば「社会的なものの超越論的規定」、評者の構図においては「社会的存在の存在論的構成」においては既に、イデアール・レエルな契機、云いかえれば目的―実践的な契機は、「外部」として排除されるものであつてはならない。そうした契機とは、超越論的自我の〈内部〉を仔細に点検しその〈外部〉を慎重に計測しようとするだけの主観などではなからうし、ましてや自己保身をはかるだけの主体でもない。そうではなくてむしろ、これまでの行論の範囲では例えば、九平少年が後ずさりしながら吐く抵抗の言葉であり、また敵の存在を識別しようとするかの少女の眼差しにおいて語り出されようとしているところのそれにほかならない。このパッションこそが、すなわちこうした受難と熱情こそが、位置づけられ、そして方向づけられなければならないのだ。著者は同じ「最終章、あるいはあとがき」で、本書を「助走」として位置づけたうえで、次の著作においては、「具体的な経験に基づいて自然と社会についての分析を現実に展開する」ことを予告していた。本著作にかんする以上の疑問が突破される水準が開かれてゆくことが期待されている。

なお、本書は論文のかたちで二〇〇〇年十月、北海道大学大学院文学研究科へ博士（文学）学位申請論文として提出されたものである。審査にあたつて協力いただいた加藤精司本学名誉教授、中戸川孝治教授、ならびに石原孝二助教授の各位に御礼申し上げる次第である。

（二〇〇一年、三七九頁）